



内山下の御殿坂付近。堀の向こう側に有終館があったと思われる

遊学時代

山田方谷は喜んで有終館で勉学し、家業にも励みました。2年が経ち、上方での遊学を願う気持ちは抑えがたく、菜種油の製造と販売が暇になった3月、23歳で京都に向かい、年末まで寺島白鹿のもとで学問に専念しました。出発に際して丸川松隠は、「斯文には淵源（儒学の根源）がある。それ

山田方谷を語る

四

を探り求めて帰る」ことを期待するという詩を贈りました。方谷はそれに就いて一生懸命努力しましたが、果たすことは出来ませんでした。その苦悩もあって、彼は蘭溪禅師のもとを度々尋ねて、禅の修業もしています。故郷に帰った方谷は、家業を行いながら日夜深く思い、心に感じるところがあり、2年後の3月から再度の京都遊学を決定しました。5月に松隠に書を送り、前回の課題について方谷が思索した結果を述べていて、それは「天人の理をきわめ、性命の源に達し、大賢君子の境地にまでのぼる」ことによつて初めて解決できると考えたことを述べるなど、2度目の遊学は大いに学問が進み、9月に帰国しています。

12月には藩主から苗字・帯刀を許され、八人扶持で中小姓格を与えられて武士の身分となり、有終館会頭（教授）に任命されました。両親の悲願が実現したのです。翌年6月には藩より内山下の有終館のほとりに邸宅をもらっています。さらに学問を深めるための遊学を考え、12月に会頭を辞めました。その時目録と銀3両を受けています。

その2カ月後、方谷が西方帰郷中に邸宅が焼失し、家財も書籍もすべて失いました。その時終館も焼失しました。留守中とはいえ、その責任を感じた方谷は松連寺で謹慎しました。1カ月後に許され、27歳の7月には3度目の京都遊学に出発しました。今回は八人扶持で資金もあり、2年間の許可をうけて、京都白鹿邸に入りました。鈴木遺音の塾にも入り、春日潜庵などの多くの学者と交わり、学問研究も進みました。

生計の困窮を訴えた弟の手紙に対して、方谷は、「家の窮乏は心痛に堪えません。たとえ資産がますます減つてもそなたの罪ではありません。私は微力ですがに責任だけが重く、日暮れて道遠しの感があります。たとえ世間の人に笑われても、亡き父の志は継がねばなりません。主君の恩に報いなければなりません。家を離れ年を忘れ、慈母や妻子の愛をなげうち他郷に遊学、力尽きて中途で死ぬとも志を果たす覚悟です。この志は天下の力を以つてしても動かすことは出来ません」と返書し、学問研究を続ける強い意志と剛毅な性格を示しています。この頃「伝習録」を読んで王陽明の学問を知り、さらに学ぶため、3年間の学業延長を許され、29歳の暮れに江戸に行き、佐藤一斎の塾に入つて修業することになりました。

一斎は「陽朱陰王」といわれ、幕府の学問所、昌平黉では朱子学を教え、家塾では陽明学も教えています。この頃、佐久間象山と毎夜激論し、象山が洋学を重視するのに対し、方谷は儒学で充分やれると譲らず、他の塾生がやかましいので一斎に中止を依頼すると、こっそり聞いていた一斎は「つこり笑つて、「まあ、やらしておけ」と言つた」と話です。学識・人格に優れた方谷は塾頭となっています。

この佐藤塾時代に、各藩が財政的に困っている現状に対し、その対策として「理財論」を書いていきます。これは後年に実施する藩政改革の理念になっています。「事の外に立ちて事の内に屈せず」「義を明らかにして利を計らず」の心で、名君と賢臣が思いをこらし、ぜいたくを排除し、賄賂を禁じ、民物を豊かにし、文教を盛んにすれば財政は健全になると述べています。

無理がたたつたのか、31歳の5月に方谷は大病を患い、生死の境をさまよいましたが、回復した後は、以前より強健になったということです。翌年5月に娘瑳奇が天然痘にかかり、11歳で亡くなっています。どんなにつらかったことでしょう。方谷の嘆きが推測できます。この年の9月に遊学期が終わり、藩主板倉勝職に従つて帰郷しました。天保七（一八三六）年のことでした。（文・児玉亨さん）



順正専門「介護福祉学科」1期生が卒業

順正高等看護福祉専門学校では、「介護福祉学科」から、初めての卒業生を輩出することができました。平成24年4月に本校へ入学した1期生は、18歳から50歳代と幅広い年代の決意と覚悟を持って集まった学生たちでした。

高い技術と知識を持った「介護福祉士」を目指し、学生たちは2年間さまざまな困難にもめげず、授業に実習にと勉学に励み、晴れて卒業の日を迎えると同時に、介護福祉士の国家資格を取得することができました。

卒業式後に行われた謝恩会は、2期生からのサプライズのお祝いもあり、和やかな雰囲気で行われました。終盤には卒業生一人一人が、涙ながらに2年間の思い出と社会に出て介護福祉士として働く抱負を語ってくれました。

教職員一同、学生を送り出す寂しさを感じながら、入学時から大きく成長した学生を頼もしく思い、これからの介護業界を担い活躍してくれることを期待し卒業を祝いました。

皆さんも介護福祉士を目指し、福祉の明日と一緒に考えてみませんか。



■問い合わせ 順正学園入試広報室 フリーダイヤル0120-25-9944

成羽病院通信

■問い合わせ 成羽病院 ☎423111

マンモグラフィ検査を受けましょう

乳がんは日本人の女性がかかる、がんの1位で死亡者数も年間1万1千人以上といわれています。30歳代から増え始め、40歳代後半から50歳代前半が最もかかる人が多くなっています。早く発見すれば、がんとその周囲組織だけを手術して、乳房を残すことができます。

マンモとは乳腺を意味する言葉。マンモグラフィ検査とは、乳房専用のレントゲン撮影のことです。左右の乳房を片方ずつ挟み、圧迫して撮影します。乳がんや乳房にできる病気を見つけるために有効な検査です。

マンモグラフィ検査は、乳房専用のレントゲン装置で行います。詳しいことは、各医療機関にお問い合わせください。



2月に成羽病院の検査装置を更新しました